

近年の発掘調査成果速報

— 第 26 回小さな展覧会展示遺跡から —

1. 木津川市上粕北遺跡の発掘調査

筒井崇史 P 1 ~ P 8

2. 長岡宮跡第 481 次の発掘調査

松崎俊郎 P 9 ~ P16

3. 重要文化財建造物保存修理事業に伴う発掘調査

— 清水寺境内馬駐・萬福寺松隠堂庫裏・教王護国寺（東寺）東大門 —

小池 寛 P17 ~ P23

期日：平成 23 年 8 月 20 日（土）

場所：向日市民会館 第 1 会議室

主催 京都府教育委員会

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

後援 向日市教育委員会

木津川市 かみこまきた 上狛北遺跡の発掘調査

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査員 筒井崇史

1. はじめに

上狛北遺跡は、京都府木津川市山城町上狛宝本・西浦代に所在します。木津川右岸の沖積地ちゅうせきちに位置し、調査前は水田でした。上狛北遺跡周辺では、多くの遺跡が分布します（第1図）。有名なところでは、30面以上の三角縁神獣鏡さんかくぶちしんじゆうきょうが出土した椿井大塚山古墳つばいおおつかやま（前方後円墳、全長 175 m）や、古代寺院の1つである高麗寺こまでらなどが造営されていました。

今回の発掘調査は、主要地方道上狛城陽線の建設工事に伴い実施したものです。平成22年度の調査（第2次調査）は、平成21年度の調査（第1次調査）で顕著な遺構が確認された地点を中心に調査区を広げて調査を実施しました。現地調査期間は平成22年8月24日から平成23年3月9日まで、調査面積は 1,630㎡でした。

2. 遺構の概要

調査は、現在の里道を挟んで大きくA地区とB地区の2か所に分けて実施しました（第2図）。調査の結果、中世前半（11～13世紀）、奈良時代（8世紀）、古墳時代（5～6世紀）の3時期の遺構・遺物があることがわかりました。本日は、重要な調査成果のあった奈良時代の遺構・遺物を中心に報告します。

①A地区 素掘りの井戸（S E 215）のほか、小規模な土坑どこうや柱穴などを少数検出したにとどまります。奈良時代の遺構は後世の削平が著しく、失われてしまったと考えられますが、B地区での調査成果から、本来は多数の遺構が存在していた可能性があります。

②B地区 南北方向の溝1条（S D 21）、掘立柱建物跡4棟（S B 01～04）、土坑1基（S X 96）などを検出しました。いずれも重要な遺構なので、やや詳しく報告します。

S D 21は南北の方位の溝で、総延長 100 mで、幅 0.7～1.1 m、深さは 0.1～1.0 mを測ります。S D 21からは多数の須恵器すえきや土師器はじき、瓦などが出土しました。出土した土器からおおむね奈良時代中頃～後半（平城宮土器Ⅳ）に位置づけられます（第4図）。なお、調査区内で、S D 21に直交するような溝や柵などの遺構は確認できませんでした。

S B 01は、柱間はしらまが不揃いですが、東西2間（2.8 m）、南北5間（10.5 m）の建物跡です。

S B 02 は東西 2 間 (3.4 m)、南北 1 間 (3.6 m) の建物跡です。S B 03 は東西 1 間 (2.4 m) 以上、南北 4 間 (8.4 m) の建物跡で、少なくとも東側に^{ひさし}庇を持つことを確認しました。身舎の大半は調査区外に位置します。S B 04 は東西 1 間 (1.6 m) 以上、南北 2 間 (3.3 m) で、東西方向の建物跡と推定されます。建物跡からの出土遺物は少ないですが、S D 21 と S B 01 ~ 04 は、方位をおおむね^{せいほうい}正方位に揃えていることから、同時期の遺構と考えています。

S X 96 は、大量の遺物が出土したことから^{はいきどこう}廃棄土坑、いわゆるゴミ捨て穴と考えています。掘立柱建物跡 S B 03 が、この S X 96 を埋めた後に建てられていることから、S X 96 の方が古いことがわかりました。S X 96 は一辺 3 m 程の方形を呈し、深さは約 2 m を測ります。埋土は下層から、^{もつかん}木簡を含む^{きくず}木屑層、遺物を大量に廃棄した炭層、土坑を最終的に埋め立てた埋土の大きく 3 層に分けることができます (第 3 図)。

土坑 S X 96 の出土遺物としては、^{ぼくしょどき}木簡・墨書土器などの文字資料のほか、須恵器や土師器、^{がせん}瓦埴、^{こうさい}鉾滓などが出土しました。文字資料に年代の書かれたものはありませんでしたが、出土土器はその特徴から奈良時代前半～中頃 (平城宮土器Ⅲ古段階) に位置づけられると考えられます (第 4 図)。

3. 出土遺物の概要

上粕北遺跡で出土した遺物のうち、最も注目されるのは土坑 S X 96 から出土した木簡や墨書土器などの文字資料です。また、須恵器や土師器などの土器資料、瓦埴なども注目されます。

①木簡 木簡 3 点 (第 5 図木簡 1 ~ 3) のほか、木簡の^{けず}削り屑^{くず}約 40 点が出土しました。

木簡 1 は、残存長 19cm、幅 1.1cm、厚さ 1 ~ 4 mm を測ります。「讃岐国鵜足郡少領□」と書かれています。讃岐国鵜足郡は、現在の香川県坂出市を中心とした地域にあたり、その鵜足郡の^{しょうりょう}少領 (郡司の役職の 1 つで、^{たいりょう}大領に次ぐ地位。地方の有力豪族が任命されます) から、上粕北遺跡にあった施設あるいは人物に宛てて送られた木簡と考えられます。「少領」の下に文字の一部 (おそらく少領であった人の名前) が残りますが、削り取られており、具体的な内容は不明です。ただ、上粕北遺跡と讃岐国鵜足郡との間で何らかの交流があったことがうかがわれます。

木簡 2 は、全長 14cm 以上、幅 1.7cm、厚さ 1 ~ 2.5mm を測ります。「海戸主海八目戸服部姉虫女米五斗」と書かれていると考えられます。1 字目の「海」は地名を略したものと考えられ、「海部郷」を表す可能性が高いと思われれます。ただし、どこの国に所属した「郷」なのかは不明です。その郷に住む「戸主」の「海八目」の「戸」の構成員である「服部姉

虫女」が「米五斗」とあることから税、あるいは貢ぎ物としての米を納めたと考えられます。ただ、役所に納めるような正式な荷札木簡の場合、「〇〇国〇〇郡〇〇郷……（誰々）（品名・数量）」と書くべきところを「海」1文字で地名を表している点や、女性が税の品物を貢進している例は非常に珍しく、本来は男性が圧倒的に多いことなど、役所に提出されたものとは考えにくく、寺院や貴族の邸宅など、私的な施設に送付された荷札木簡の可能性が考えられます。

木簡3は、残存長8.1cm、幅2.3cm、厚さ1～1.5mmを測ります。「草萬荒蘇」と書かれていますが、内容の意味が通らないため、字の練習（おそらく草かんむりの字を練習）した木簡と思われます。

削り屑は、約40点出土しました。すべての文字を読むことはできませんが、「長長」や「連連」「段段段」と同じ字を繰り返し書いているものがあることから、字を練習した木簡（習書木簡）と考えられます。

②墨書土器 31点確認しており、土師器が13点、須恵器が18点あります。文字のほとんどが杯や皿の底部外面に書かれていました。ほかに須恵器の鉢や蓋に書かれた例があります。判読できる文字として「代」、「昨女」、「若女」「匠」、「石」などがあります。このうち、「代」については約20点（可能性のあるものも含む）出土していますが、「代」の意味するところは不明です。また「昨女」「若女」などの女性の名前と思われるものがあります。

③瓦 軒平瓦2点、軒丸瓦1点、平瓦・丸瓦多数、塼数点が出土しました。出土した量からみると、建物の屋根に葺けるほどの瓦ではありません。ただ、軒瓦は、いずれも恭仁宮の造営時のもので、遺跡の時期を考える上で重要です。出土瓦塼のうち、軒平瓦1点、塼1点、平瓦・丸瓦の一部は遺物包含層や溝S D 21から出土しましたが、その他は土坑S X 96から出土しました。

④土器類 土師器・須恵器とも、杯や皿とその蓋が多く、壺や甕などの貯蔵具や煮炊具は少なめです。土師器では内面に暗文という文様を施すものが、土坑S X 96には多くみられます。また溝S D 21では暗文の数が少なくなるようです。上狛北遺跡で出土した土器は、全体的に平城宮や平城京などで出土する土器と同じような特徴をみることができます。

⑤このほか、土坑S X 96からは銅椀の破片や鋳滓（鉄や銅のくず）、加工痕跡のある木片など、特徴的な遺物が多数出土しています。

4. まとめ

今回の調査では、古墳時代・奈良時代・中世の各時期の遺構・遺物を検出しました。このうち奈良時代の遺構・遺物はその内容から見ても重要な成果と考えています。

まず、南北方向の溝 S D 21 は、総延長 100 m 以上を測ることから、計画的に掘削された溝と考えられ、その西側で検出された建物群を区画していると考えられます。あるいは東側に同様の溝があって、道路遺構となる可能性もあります。建物群は、規模が小振りですが、正方位を指向していることから、計画的に配置された施設と考えられます。

一方、建物群に先行する土坑 S X 96 では、平城宮や平城京で出土する土器と比較しても遜色のない土器群や、木簡・墨書土器が多数出土しました。木簡 1 については、正確な内容は不明ですが、讃岐国の郡司と上狛北遺跡にあった施設・人物が文書をやりとりしていたことを示す木簡として注目されます。木簡 2 は貢進元^{こうしんもと}（送られた先）は不明ですが、女性による貢進木簡で類例の非常に少ないものです。地名と思われる 1 字目が略記されていることと合わせて考えると、公の施設に宛てた木簡というよりも私的な施設に宛てた貢進木簡である可能性があります。

また、遺構の時期をみると、S X 96 は奈良時代前半～中頃に、S D 21 は奈良時代中頃～後半に位置づけられ、特に前者は恭仁宮遷都^{くにきゅうせんと}（740 年 12 月）の時期を含むと考えられます。S D 21 の掘削の詳細な時期は確定することはできませんが、上述のように建物と溝の一体性を考慮すると、溝の時期が S X 96 を大きく遡ることはないと思われます。

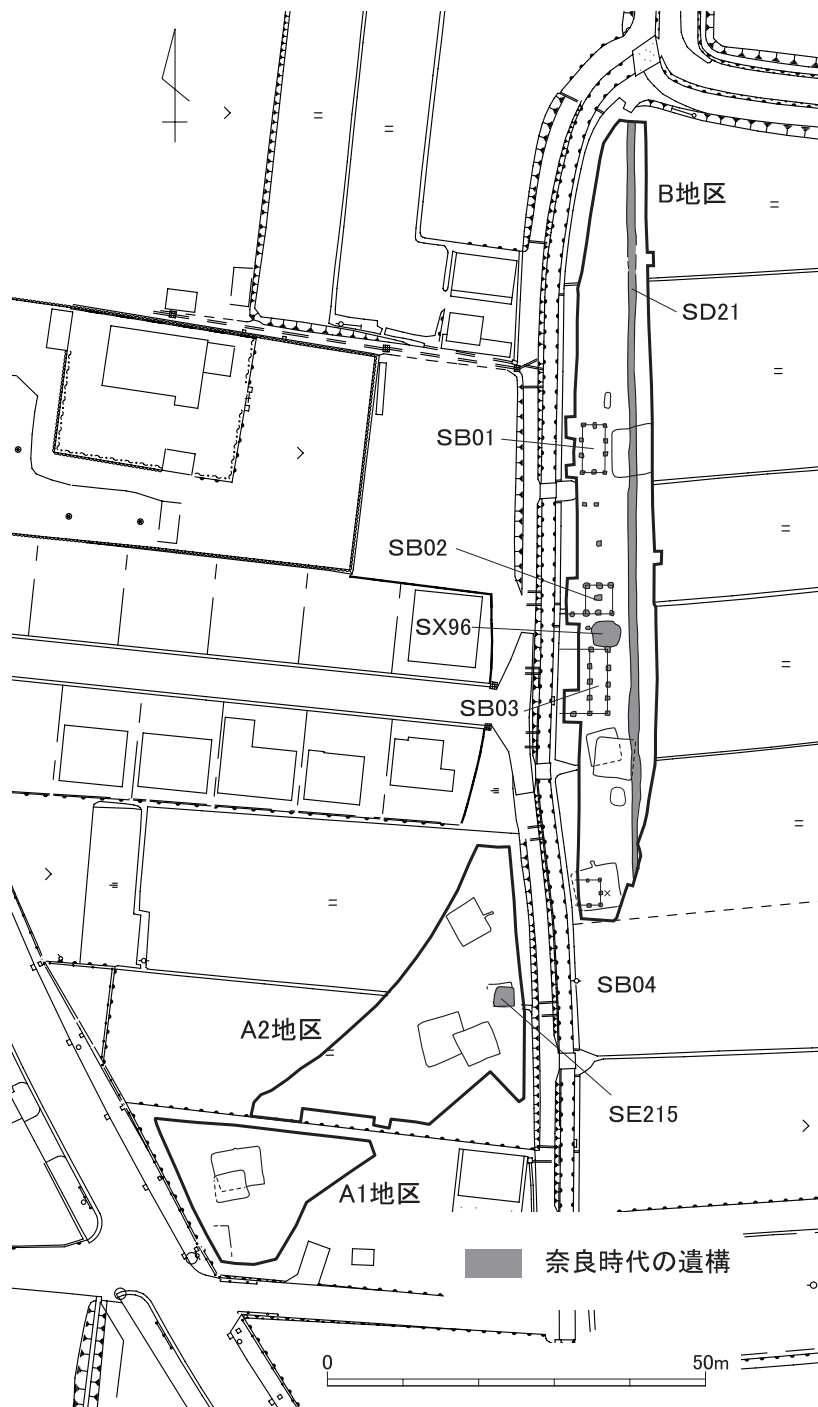
以上のように、今回の調査では、恭仁宮が営まれたのとはほぼ同時期（740～744 年）の遺構を検出することができました。遺構の配置状況や出土した遺物の内容などから、これまで確認されていない恭仁京の右京域の遺構について、存在する可能性をはじめて示すことができる成果と考えています。

遺跡の全容を確認していく必要がありますが、現状では S D 21 の掘削や建物群の造営の契機は、恭仁宮遷都や恭仁京の造営に求めることがもっとも妥当な結論と考えています。また、土坑 S X 96 は京域や諸施設の造営によって生じた不要物を廃棄したゴミ捨て穴の可能性を考えています。

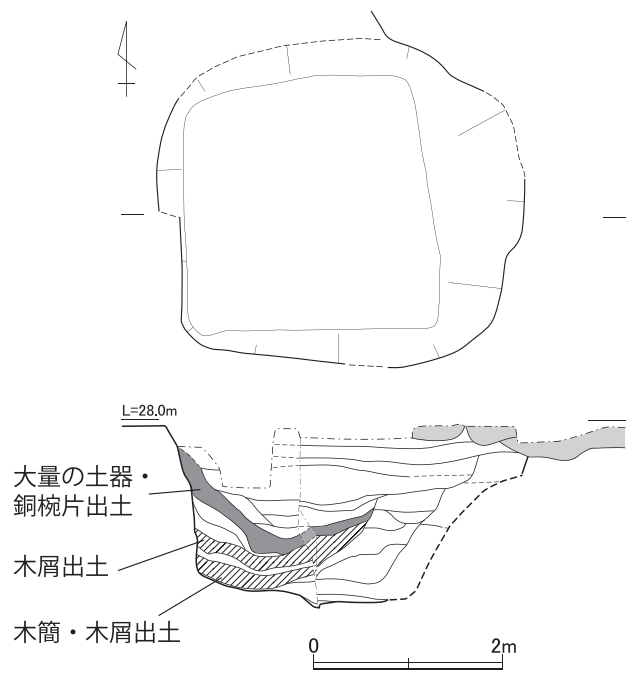
以上のように、今回の調査地周辺が恭仁京跡の一角である可能性が高くなりましたが、恭仁京そのものは、どこまで完成していたかは明らかではありません。これは、今後の調査・研究に期待されるところが大きいといえます。



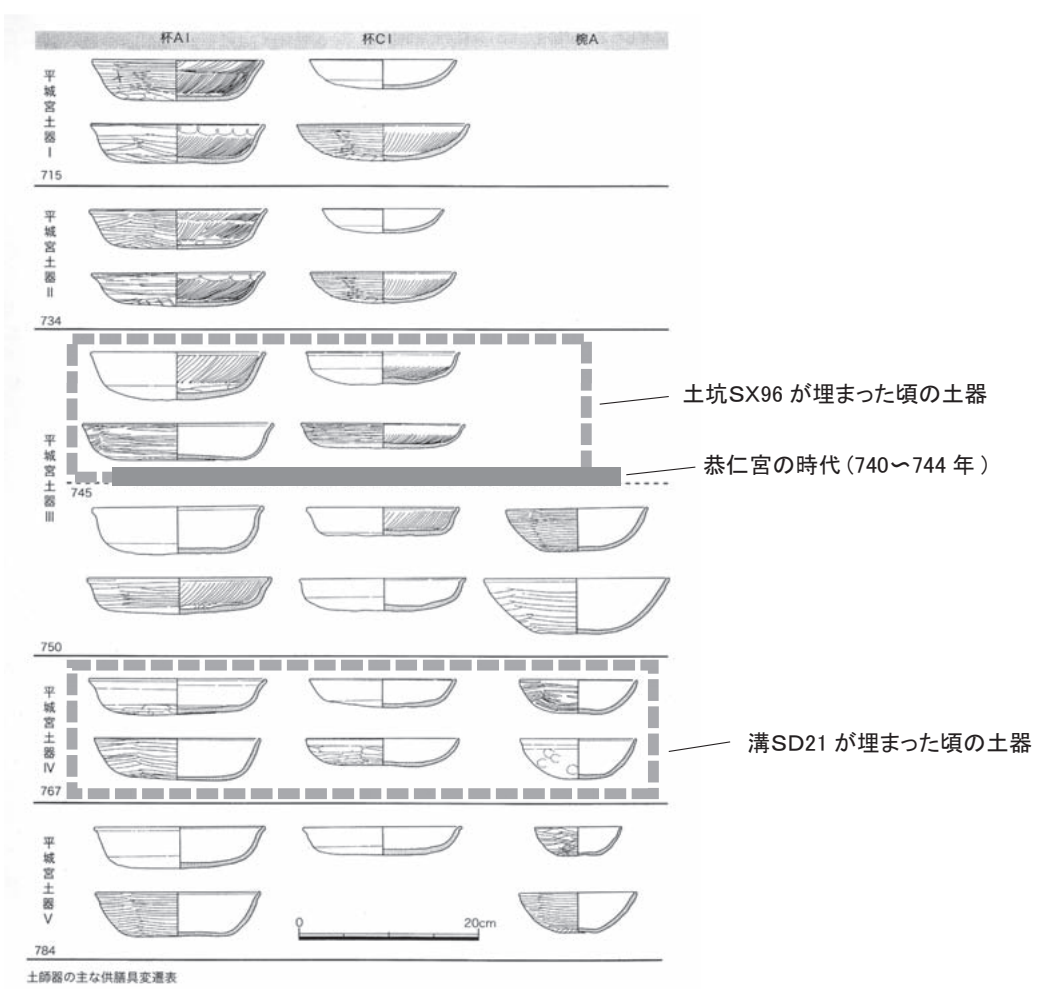
第1図 上粕北遺跡周辺主要遺跡分布図 (S = 1/50,000)



第2図 上粕北遺跡遺構配置図 (S = 1/1,000)



第3図 土坑S X 96 実測図 (S = 1/80)



土師器の主な供膳具変遷表

第4図 上狛北遺跡出土土器の位置付け

(奈良文化財研究所編『図説 平城京事典』(2010) 407 頁掲載土器編年表を一部改変)



讃岐國鵜足郡少領 □

木簡1



海戸主海八目戸服部姉虫女米五斗

木簡2



草萬荒蘇

木簡3

木簡のスケールは原寸大

第5図 土坑S X 96 出土木簡

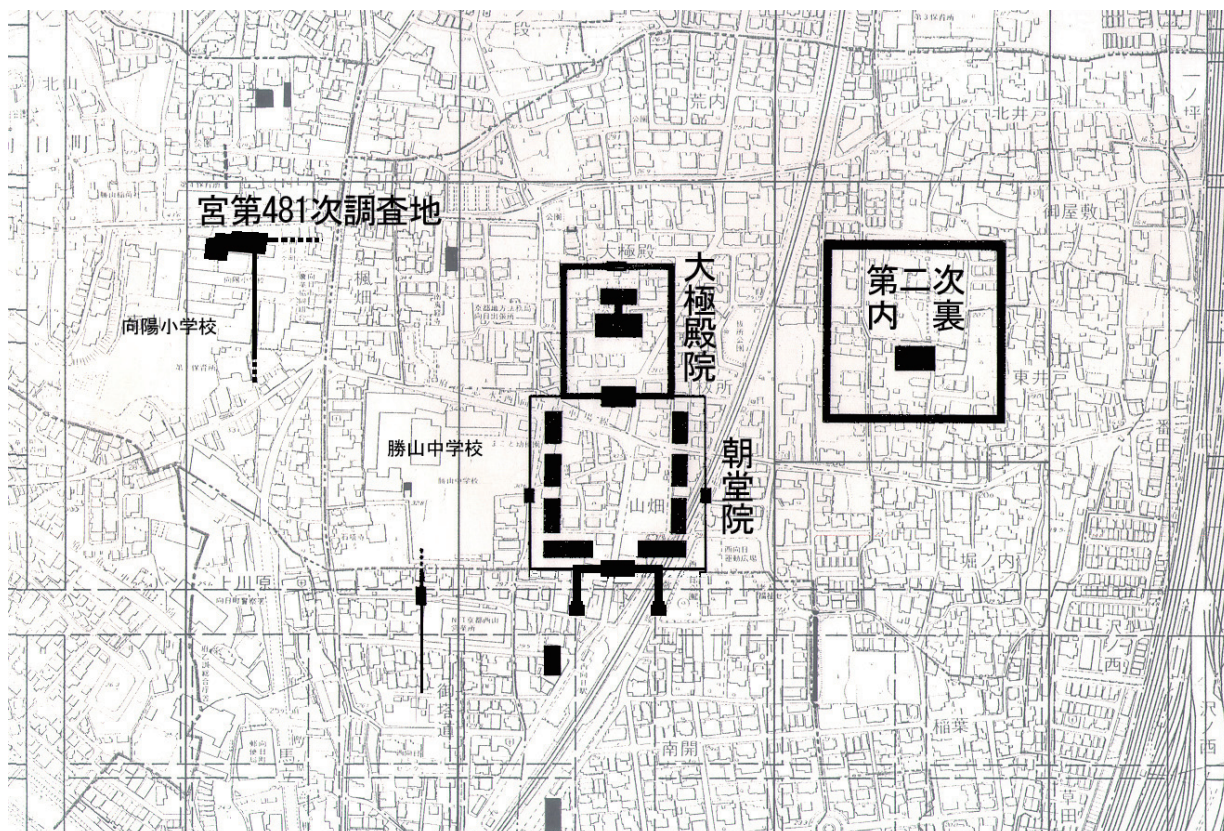
ながおきゅうあと
長岡宮跡第 481 次の発掘調査

財団法人 向日市埋蔵文化財センター

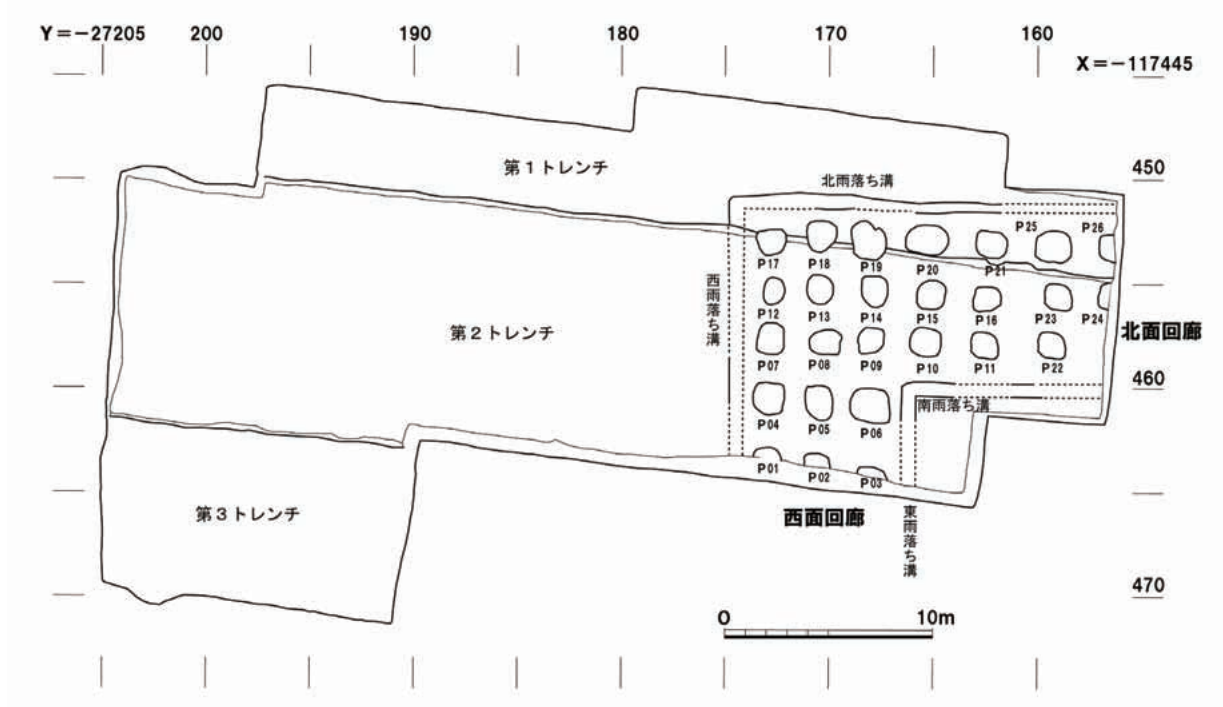
調査係長 松崎俊郎

1. はじめに

財団法人向日市埋蔵文化財センターは平成 23（2011）年 3 月 14 日～平成 23 年 3 月 31 日にかけて向日市向日町南山の向陽小学校内で実施した宮第 481・482 次調査を実施しました。調査の結果、大極殿^{だいごくでん}を中心にほぼ対象地で東に折れ曲がる複廊遺構^{ふくろういこう}を検出しました。複廊遺構の存在は以前の調査で明らかになっていましたが、この遺構が東に曲がり、一辺 100 m 以上あることが判明したことは長岡宮^{ながおきゅう}の構造を考える上で重要な成果となり



第 1 図 宮第 481 次調査地位置図



第2図 宮第481次調査地平面図

ました。

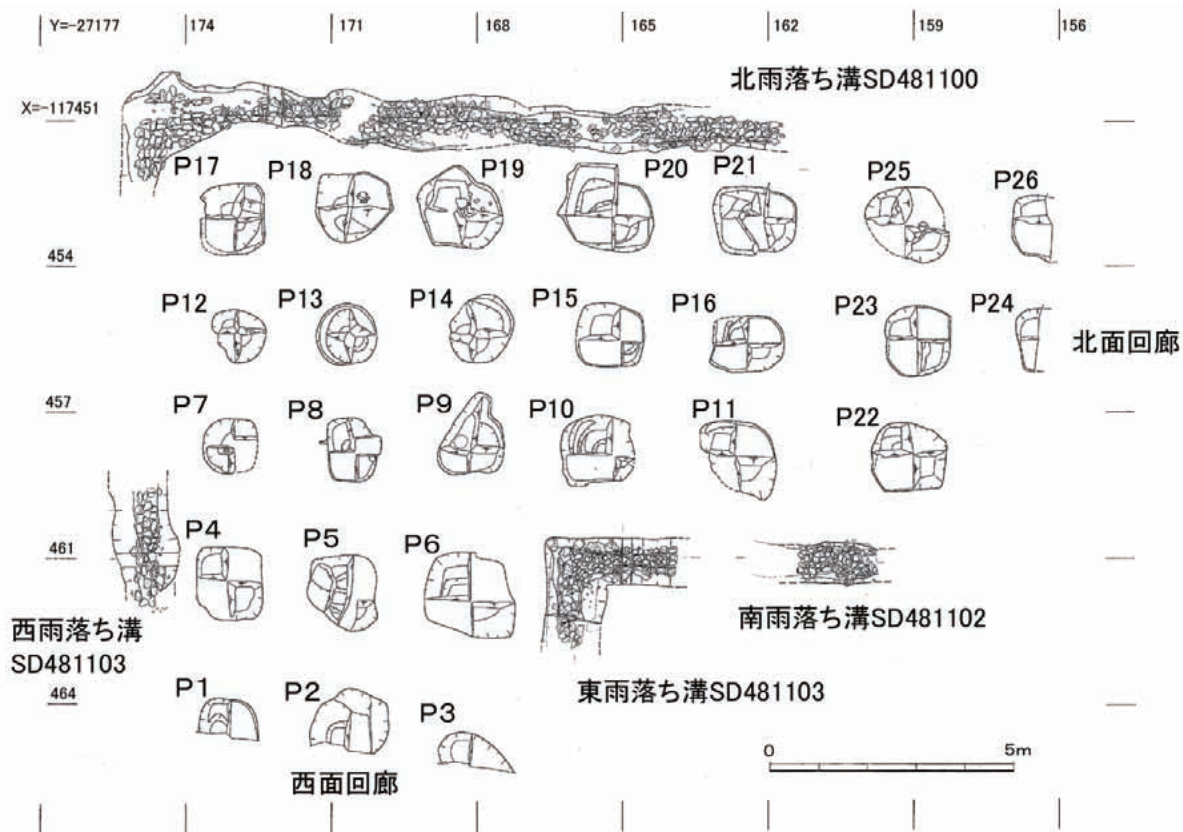
2. 発見された遺構

今回の調査で発見された長岡京期の遺構は相互の位置関係から複廊が東に折れ曲がるコーナーを構成する一連の遺構と考えられます。遺構別に概要を説明します。本来なら北面回廊の北雨落ち溝と呼称すべきですが、煩雑にならないように北雨落ち溝、南雨落ち溝と省略した呼称を使用して説明します。

〔北面回廊北雨落ち溝 S D 481100〕 東西方向の石組み溝で、幅 0.5 m 前後、深さ 0.4 m 前後あります。西端から長さ 13.0 m 分を確認しました。宮第 178 次調査と合わせますと、総延長で 36.0 m 前後を確認したことになります。第 1 トレンチ内で西面回廊の西雨落ち溝とのコーナー部分を確認しました。

〔北面回廊南雨落ち溝 S D 481102〕 第 2 トレンチで検出した東西方向の石組み溝です。西端で南に折れ曲がり東雨落ち溝 S D 481103 に接続します。幅 0.4 ~ 0.45 m、残っている部分で、深さは 0.2 m 前後で、溝西端のコーナー部分は抜き取られたためか石に乱れが認められます。今回の調査では拡張部を含め長さ 7.5 m を確認しました。

〔西面回廊西雨落ち溝 S D 481101〕 第 1・2 トレンチで検出しました。南北方向の石組み溝です。途中は失われていますが、石は底石と側石の最下段を確認しました。上は失われています。今回の調査で北端から長さ 9.5 m 分を、宮第 84 次調査と合わせおよそ 68 m 分を確認しました。



第3図 複廊 SC481104 平面図

〔西面回廊東雨落ち溝 S D 481103〕 第2トレンチで検出した南北方向の石組み溝です。東雨落ち溝の底石には1点だけ円形の凝灰岩が確認できます。今回の調査で長さ1.5m分を、宮第65次調査とあわせおよそ38m分を確認しました。

雨落ち溝の全体で見ると複廊の外側に位置する北・西雨落ち溝と、内側に位置する南・東雨落ち溝では作り方が少し異なっています。底石の施工状況を見ると、北・西雨落ち溝コーナー部付近では、溝底に設置に掘り込まれたと考えられる窪みが見られます。また、石材を外した後に再度設置し直した際の状態を見ても、北・西雨落ち溝の底石ができるだけ両面とも平坦な石を使用して、かつ上面を平坦にするための施工がなされていることが判明します。また、側石2段目の石の使い方は異なりますが、2段目に大きな石を用いる点では同じとも言えます。ただし、南側溝では第2トレンチと第4トレンチの第2段目の石では第2トレンチの石が大きいところから、コーナー部には大きめの石を使用している可能性を窺うことができます。こうした点から外側に当たる北及び西雨落ち溝の方が内側の南・東雨落ち溝より丁寧に作られていると言えます。同様に石の使い方にも差異が見られます。1段面までは両側溝とも底石の両側に側石の1段目を置き、その背後に2段目を据えますが、北雨落ち溝が2段目の石を長軸方向に立てるのに対し、南側溝では北壁面より大きめの石を横方向に使う点や、底石も西・北側溝に比して平坦面を意識して施工した

とは考えにくい状況が見られます。こうした差異が内外面といった位置関係による差なのか、施工者の違いなのかは不明です。

また、溝底面の標高を細かく見ていくと、西面回廊の北部は北側に、北面回廊は東側に排水したことが判明します。

〔複廊 S C 481104〕 南側で行われた宮第 65・84 次調査で確認された回廊 S C 6501 の北延長部で、調査地内で東に折れ曲がります。調査地内では総数 26 個の柱掘形を検出しました。柱と柱の間の長さはコーナー部分では東西南北とも 8 尺等間 (2.4 m)、回廊部分では梁間 8 尺 (2.4m)、桁行 10 尺 (3.0 m) となります。柱掘形は一辺 1.3 ~ 1.6 m 前後、北雨落ち溝北側石最上端部からの深さは 1.7 m 前後もあります。西面複廊の幅は東西の雨落ち溝の中心と中心の距離から 8.6 m、北面回廊の幅は 8.8 m と判明しました。軒の長さは南面と東面が長いこととなります。北面回廊は、宮第 178 次と合わせ約 36 m、西面回廊は宮第 65 次調査と合わせ約 111 m が確認されたこととなります。

3. 発見された複廊遺跡の成果と課題

複廊遺構の性格については従来から「西宮」「嶋院」など文献に記載されている長岡宮の諸施設が該当するのではないかと言われてきました。今回、北西角が発見されたことで規模などを推定する定点を得ることができました。こうした点も含め、現時点での課題と成果を見てみます。

(1) 複廊の成立時期と廃絶時期

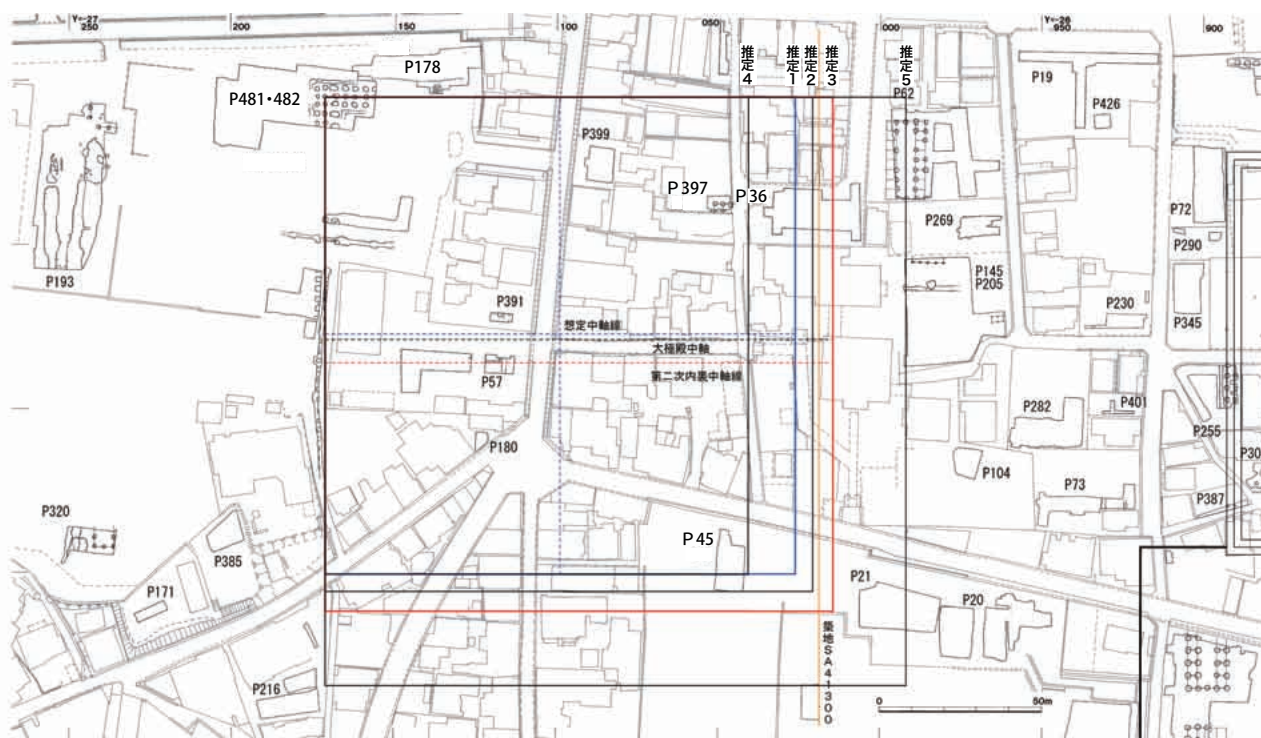
長岡京は 10 年間の都であるために遺構の切り合い関係（前後関係）等がないとなかなかその時期を知ることは困難です。瓦の研究から大まかに言えば難波宮の資材を主に使用する時期、平城京の資材を使用しはじめる時期、長岡京のため作られた資材を使用しはじめる時期に分けることができ、今回の複廊に平城京の資材を使っていることは明らかです。

(2) 複廊全体の復原

今までに発見された遺構から考えられる想定としては、今回見つかった回廊北西角を原点に西面で検出された門の位置を検討すると、検出された門中軸までの距離は 72.8 m で、門の北柱までが 71 m、北面回廊南柱筋からの距離では 68.6 m、10 尺等間 (2.96 m) で 23.2 間の距離を測ることになります。

推定 1 門まで 23 間、全体で 51 間と想定した場合

北面回廊南柱筋から 68.08 m で門北側柱となり、門の中軸は $X = -117527.824$ となります。大極殿中軸の北 1.226 m (約 4.14 尺) に門の中軸が位置します。この値から回



第4図 複廊区画推定復原案

廊の規模を求めると門の中心から北面回廊中軸までが72.224 m (244 尺) で折り返すと144.448 m (488) 尺の回廊中軸間距離が得られます。この位置関係で周辺調査地を見ますと、東面回廊の中軸は $Y = -27026.052$ となり、宮第36次調査地西半部を通過することになります。宮第36次調査地の正確な位置や検出遺構の詳細は不明です。北半部では江戸時代の墓や東半部では長岡京造営以前の掘立柱建物が検出されています。回廊の推定部分に該当する西半部は一部未調査部があるものも回廊に関係する遺構は検出されていません。推定南面回廊中軸は $X = -117599.848$ になり宮第45次調査地が該当します。宮第45次調査は未報告で位置・検出遺構とも詳細は不明です。掘形は北部の東西南北とも2.4 m 間隔の6基(?)の掘形群と南部の南北2.4 前後、東西3.0 m 前後の4基(?)の2群に分けることができます。1/500 地形図との合成からの読み値ではありますが、南西角の掘形の座標値は $X = -117603.0$ 、 $Y = -27049.0$ です。西面回廊と同じ割り付けで復原した南面回廊南柱の想定柱位置 $X = -117602.216$ 、 $Y = -27049.14$ に近似します。

東面回廊東雨落ち溝は宮第64次調査検出の南北棟建物と約23 m 離れます。東面回廊中軸は朝堂院中軸の西185.652 m (627.2 尺)、築地 S A 41300 中軸の西7.552 m (25.51 尺) に位置します。施設全体の中軸($Y = -27098.276$)は朝堂院中軸の西257.876 m (871.20 尺) に位置します。

推定2 門まで24間、全体で53間と想定した場合

北面回廊南柱筋から71.04 m ($X = -117528.808$) で門北側柱となり、門の中軸は X

= - 117530.6 となります。大極殿中軸の 1.55 m (5.2 尺) に門の中軸が位置します。この値から回廊の規模を求めると、門の中心から北面回廊中軸までが 75.08 m (254 尺) で折り返すと 150.16 m の回廊中軸間距離が得られます。この場合も、同様に推定東面回廊 (Y = - 27020.34 m) には宮第 36 次調査地が、推定南面回廊には宮第 45 次調査地が該当することになります。2 調査地については前述しました。南回廊中央柱筋の想定柱位置 X = - 117602.856、Y = - 27049.089 で先の値に近似します。

宮第 64 次調査検出の南北棟建物と東面回廊東雨落ち溝は約 17 m 離れます。東面回廊中軸は朝堂院中軸の西 179.94 m (608 尺)、築地 S A 41300 中軸の西 1.84 m (6.2 尺) に位置します。施設全体の中軸は朝堂院中軸の西 255.02 m (861.5 尺) に位置します。この場合、西面回廊の門の位置が図の読みからの値と 2.0 m 以上ずれることとなります。

推定 3 北西角を起点に第二次内裏だいりと同規模と想定した場合

第二次内裏の築地心々間距離は 159.09 m で、これを元に柱間はしらまを想定すると、検出された柱間では整数値を得るができません。推定東面回廊は宮第 36 次調査の長岡京造営以前の掘立柱建物と重複することになります。推定南面回廊は柱位置の該当する調査地がありません。

推定 4 推定西一坊坊間大路中軸で反転する想定。

明確な西一坊坊間大路にしいちぼうぼうかんおおじ関連の遺構は検出されていないので、左京第 335 次検出の東一坊坊間大路ひがしいちぼうぼうかんおおじ関連のデータを援用します。東一坊坊間大路西側溝 S D 33501 の座標値 (Y = - 26587.50) を朝堂院中軸で折り返し、溝心々間を 24 m をした場合の中軸は Y = - 27105.3 となります。このときの施設の東西幅は心々間で 130.4 m となり、西面回廊の値からすると南北が長い施設となります。

推定 5 後期難波宮こうきなにわのみやの内裏だいりをそのまま移築したと想定した場合。

後期難波宮内裏の東西幅は 179.3 m で、この東西幅で復原すると宮第 62 次調査地検出のひさしつ廂付き南北棟掘立柱建物と重複しますので、東西幅はこの幅で推定することはできません。この距離で西面築地を復原すると門の位置は整合的ではありません。

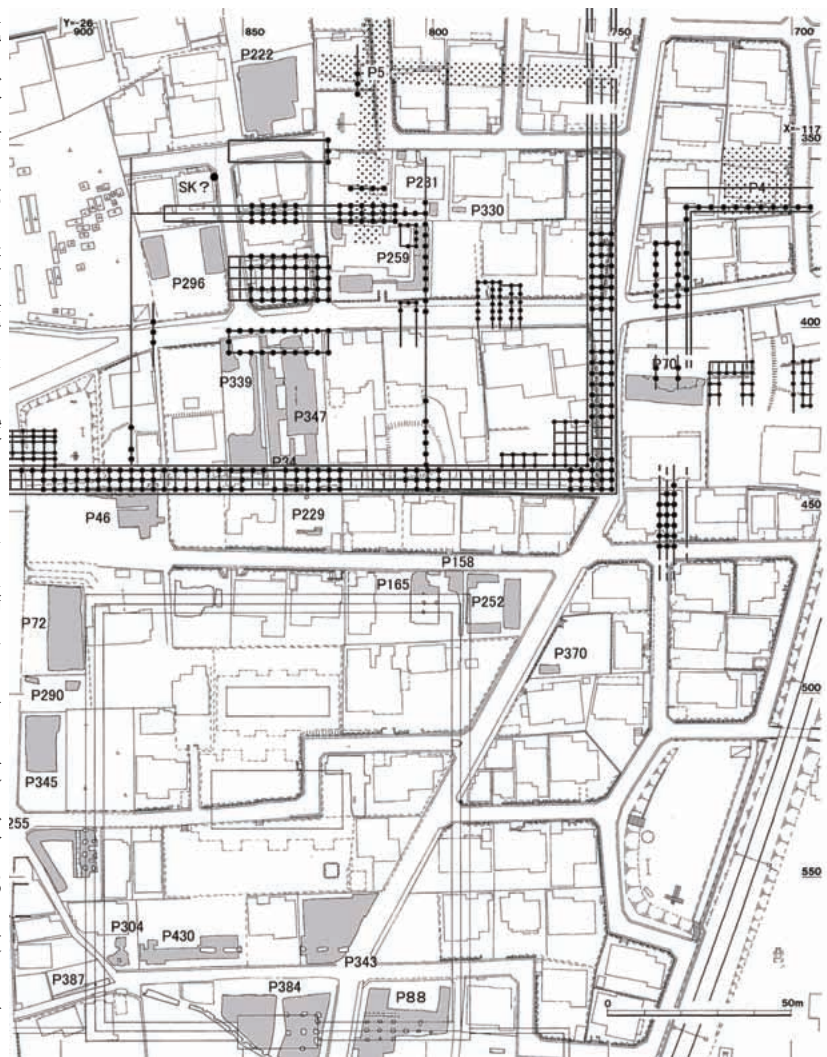
(3) 東宮と推定西宮の立地について

表に示したように東宮の東西方向について勾配をみると、東西回廊の雨落ち溝の勾配では 0 度 45 分で、他の遺構検出面の標高を見ても、極めて緩やかであることが判明します。調査によって東方へ盛り土を施して平坦面を確保していることが判明しており、極めて精密な技術で造営が行われたことを示しています。翻って、推定西宮の勾配はどうでしょうか。同じ性格の遺構で比較できないために明らかではありませんが、推定値を用いながら案を示してみます。

同一性格の遺構で勾配が明らかな例は北面回廊北雨落ち溝があります。この溝の勾配は0度30分の勾配を示します。これは東宮と比べても遜色はない値です。一方検出された柱掘形から窺うことのできる勾配は、宮第481次の検出高37.7mと宮第397次の掘形34.1mで見ると1度43分と約3倍の勾配を示します。ただし、宮第397次の掘形の遺存状況は浅く、掘形の規模と深さが対応すると考えると0.7m前後は削平されていると考えられ、これを補正しても約1度20～30分の勾配が想定できます。雨落ち溝の勾配で東面回廊を推定すると約1.3m前後（検出遺構面の約3m上）下がる事となります。また、宮第397次調査地は1.05m前後下がり（標高36.6m前後）で2m以上削平されたことになり、遺構の検出状況とは整合しません。これから、第二次内裏と同様な平坦面での配置は想定できず、一定の段差を持っていたと考えられます。

(4) 大極殿院北方の状況

長岡京期の地形を復原する意味で、周辺での遺構検出面の標高を見ていきます。大極殿院北西回廊が標高約31.0m、北面回廊に北接する宮第229次の標高が29.6～30.1m、南西部の山畑4号墳しゅうごうの周濠検出面が29.0～30.0m、宮第229次調査の北側、かいせきだに解析谷の南斜面で実施された宮第339次だんきゅうそうとうそうの段丘相当層検出高はトレンチ南端（大極殿側）で29.2m、北端で27.6m、347次調査の長岡京期溝の検出高が南北溝では27.7m、北端の東西溝では27.1mです。開析谷の北側斜面で実施された宮第259次の長岡京期の溝状遺構の標高は27.4m、宮第295次調査の段丘相当層検出高は27.8～29.0m、解析谷の北肩付近に当たる宮第222次調査の段丘相当層検出高は29.4～29.7mです。これからすれば大極殿院



第5図 長岡宮大極殿と後期難波宮内裏

の北側には谷状の地形が示唆されましょう。

第一次内裏をどのような位置にどの規模で想定するかにもよりますが、図に示したように後期難波宮の大極殿院北面回廊と長岡宮大極殿院北面回廊位置を重ねてみると内裏正殿^{だいらせい殿}は谷地形の中に位置することになります。これは長岡宮第二次内裏を重ねてもほぼ同様です。内裏正殿が最も低い位置にするとは考えにくいです。では谷状地形を越えた北側に想定したとすると宮内一条大路^{きゆうないちじょうおおじ}の想定位置より北まで内裏が位置することになると同時に今回の複廊施設推定地以上の段差のある部分に内裏を造営することとなります。また、調査例は少ないですが、現在までの知見では当該地に内裏関連と考えられる遺構はおろか長岡宮関連の遺構の発見例もないような状態です。

4. まとめ

調査地及び周辺の考古学的成果を中心に今回の検出遺構の規模などをみてきました。第一次内裏推定地で該当する遺構が検出されていない事や、今回の複廊区画の規模や位置、掘立柱複廊が伝統的に内裏に用いられてきた建築様式であることから、今回の複廊区画が延暦4（787）年の記事に登場する「西宮」である可能性は高いと思われます。

残念ながら現時点ではこれを裏付けるだけの文献資料や内部構造を示す考古学的成果は上がっていません。将来的に内部構造を明らかになるような成果や文字資料が蓄積された段階で再評価すべき遺構ですが、この区画の存在が明らかになったことは長岡京のみならず都城制研究^{とじょうせい}の中で非常に重要な成果といえます。

重要文化財建造物保存修理事業に伴う発掘調査

きよみずでらけいだいうまとどめ まんぶくじしやういんどうくり きやうおうごくじ どうじ どうだいもん
 一 清水寺境内馬駐・萬福寺松隠堂庫裏・教王護国寺（東寺）東大門一

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

課長補佐 小池 寛

1. はじめに

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、近年、重要文化財に指定されている建造物の保存修理事業に伴う発掘調査を手掛けております。

国宝や重要文化財の建造物が建ったままでの発掘調査でしたが、周知の遺跡の発掘調査とは異なり、社寺に伝わるさまざまな建物の歴史的沿革や修理の記録が明らかになっている場合が多く、文献の記載事項を検証する機会である一方、記録にない新たな事実を提供することとなりました。

今回は、平成 21・22 年度に発掘調査を行いましたきよみずでらけいだい うまとどめ
 隠元禪師が住まわれていたまんぶくじしやういんどう くり、そして、きやうおうごくじ どうじ
 のとうだいもん
 の東大門の調査成果についてご報告します。

2. 清水寺境内の馬駐

所在地 京都市東山区清水寺 1 丁目 294 番地

調査期間 平成 23 年 9 月 7 日～同 9 月 26 日

清水寺は、えんりやく さかのうえのたむらまる ほつがん こんりゆう
 延暦 17(798)年に坂上田村麻呂の発願により建立されたと伝えられています。
 今回、発掘調査を実施したうまとどめ さんけいしゃ
 馬駐は、参詣者の馬を一時的につなぎとどめる施設で、清水寺
 けいだい
 境内の入口に位置する仁王門の北脇に、建物の正面を南に向けて建てられています。馬駐
 が創建された時期はよくわかりませんが、室町時代中期の文献において、その存在が確認
 できるようです。

馬駐は、ぶんめい おうにん
 文明元（1469）年、応仁の乱により他のお堂や塔などとともに焼失しましたが、16 世紀中ごろの『清水寺参詣曼陀羅』に復興した馬駐のいたぶ
 ばんけいまだら ふつこう
 現在の建物は、げんな
 元和年間（1615～24）に建て替えられたと考えられています。江戸時代

の馬駐は、現在地から南へ約 10m のところに建っていましたが、明治 30 年に現在地へ建物を解体せずに移設（曳屋^{ひきや}）されました。

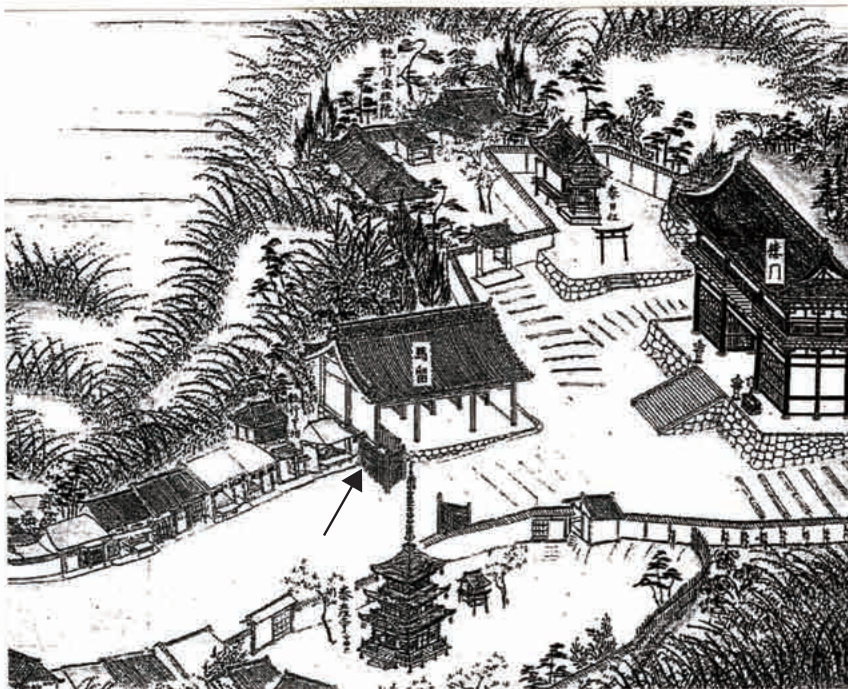
発掘調査は、曳屋される以前の馬駐の位置と床張りの有無を確認する目的で実施しました。石畳をはずしますと、調査区の東半において黄褐色シルトもしくは橙褐色の堅く締まった地面の広がりを確認するとともに、北半では東西方向に並ぶピットを確認しました。ピットには柱の痕は確認できませんでしたが、堅く締まった土で埋められており、建物の礎石を据える地固めの跡とも考えられます。なお、ピット間の距離が、2m と 2.7m であり、馬駐の柱間の距離は 2m であることから、これらのピット群が曳屋される前の馬駐に関係するとまでは言えませんが、近世以後に何らかの施設が存在したことが確認できました。

なお、出土遺物は、20 × 40 × 60cm の整理箱に 2 箱分出土しました。出土遺物の多くは、近世以降の瓦片や土器、陶磁器類ですが、中世以前にさかのぼる遺物も出土しています。

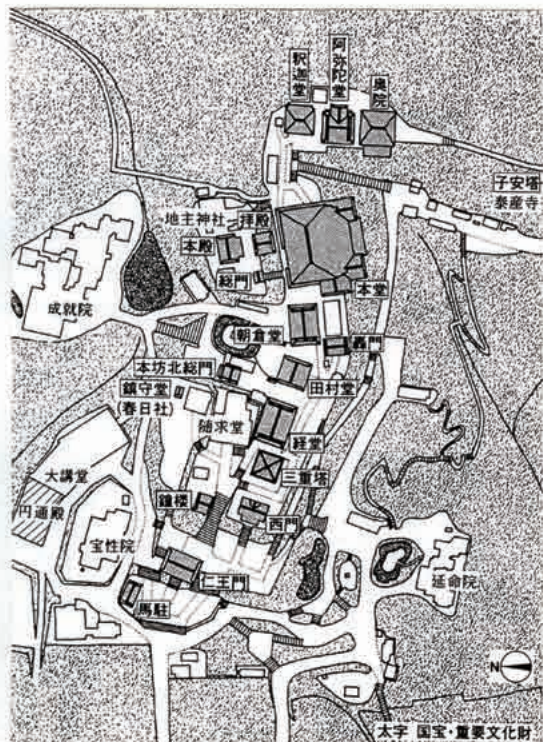
今回の発掘調査では、馬駐に直接関連する柱跡などは確認できませんでしたが、中世から近世にかけて、なんらかの建造物があったと推測される柱跡などを確認することができました。明治時代以降、清水寺の門前整備がたびたび行われたため、馬駐に関係する遺構が削平を受けたのではないかと考えられます。



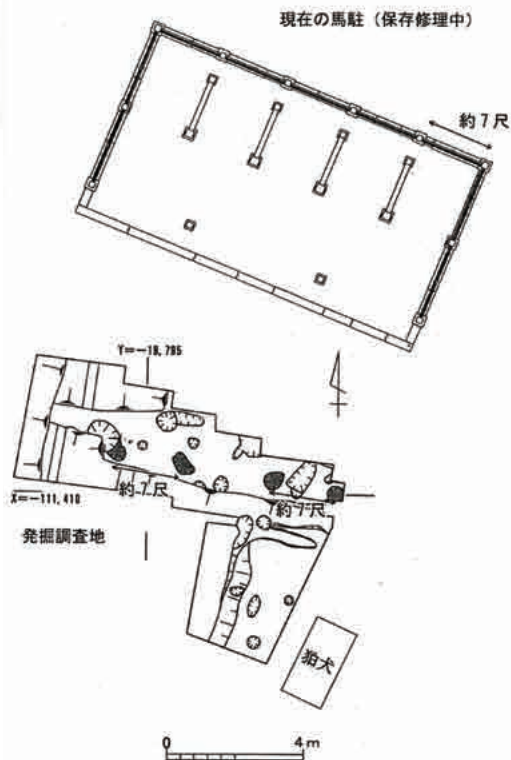
調査地位置図 (京都東南部)



江戸時代後期の馬駐 (洛東清水寺惣絵図) 大工頭中井家建築指図集
思文閣出版より



清水寺境内図



現在の馬駐と調査地において検出した遺構図

3. 萬福寺松隱堂庫裏

所在地 宇治市五ヶ庄三番割 34

調査期間 平成 21 年 12 月 1 日～同 12 月 25 日

萬福寺は、中国福建省から承応三（1654）年に渡来した隱元禪師が、後水尾天皇や 4 代将軍徳川家綱の尊崇を得て、寛文元（1661）年に開創した寺院です。

松隱堂は、寛文四（1664）年に退隱した隱元禪師が寛文十三（1673）に亡くなるまで過ごした施設です。当初は、開山堂参道の東に建てられていましたが、延宝五（1677）年、現在地に建物を解体せずに移設（曳屋）されました。

発掘調査を行った松隱堂の台所である庫裏は、当初、南北 4 間×東西 6 間の柿葺きの建物跡と推定されており、屋根には二か所の煙出しがあったことが、解体された建築部材からわかっていました。今回は、曳屋された当初の庫裏と竈の位置や規模を確認する目的で発掘調査を行いました。

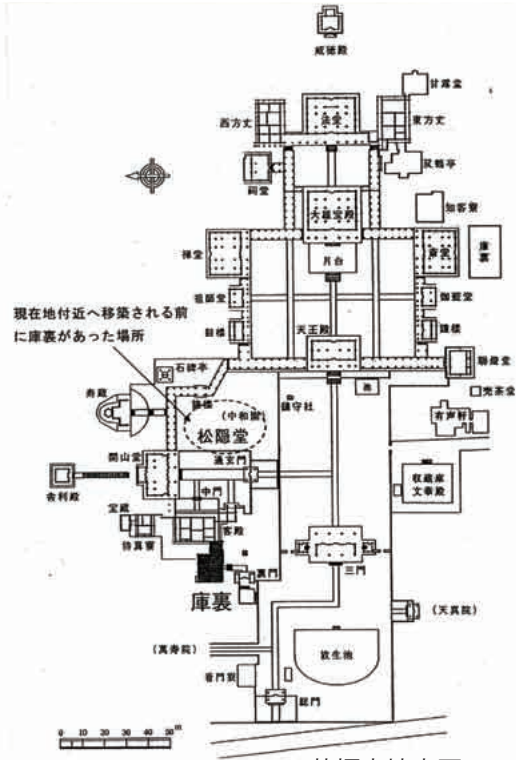
発掘調査は、建物を完全に解体した後に実施しました。地面上には、解体する前の建物の柱を受けていた礎石群と柱を受けていない礎石群が整然と並んでいました。このことから解体された建物よりも古い建物が存在したことを確認できました。また、礎石がない部分を調査しますと、礎石を安定させるための地固めの跡を 4 か所で確認することができました。そのことから、延宝五（1677）年に現在地に曳屋された直後の庫裏は、今よりも 1 間、東に建てられたことがわかりました。それとともに当時の庫裏が、南北 4 間×東西 6 間の規模であることも判明したのです。

一方、竈は、場所を変えながら 4 回、造り直されていることがわかりました。当初、最初に造られた竈と屋根の西側煙り出しとの位置が一致しないようにみえましたが、曳屋直後の庫裏が、1 間東に建てられていることから両者の位置関係がぴったりと一致しました。

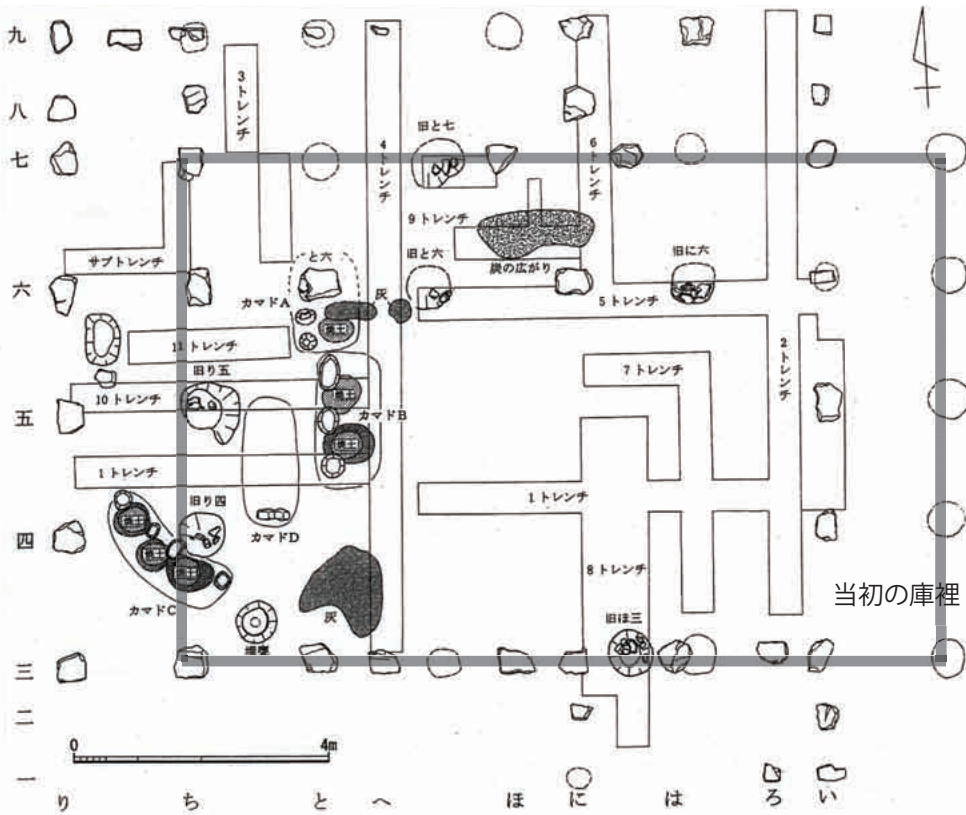
今回の発掘調査では、今まで述べましたように延宝五（1677）年に現在地に曳屋された直後の庫裏が、南北 4 間×東西 6 間の規模であり、今よりも 1 間、東に建てられたことがわかりました。また、建物の移設に伴い、大黒柱などを避けるために竈がたびたび移設されたこともわかりました。出土遺物は、整理箱に 4 箱分出土しました。全体的に小型の碗などの煎茶関係の陶磁器類が際立っています。萬福寺の隱元禪師が、日本の煎茶道の開祖とされるにふさわしい陶磁器群が出土したことは大いに注目できることです。



調査地位置図 (宇治)



萬福寺境内図



礎石の配置とかまど

4. 教王護国寺（東寺）東大門

所在地 京都市南区九条1丁目

調査期間 平成23年1月11日～同1月28日

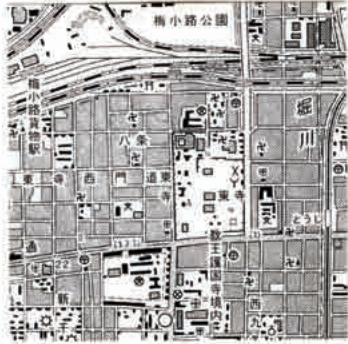
教王護国寺（東寺）は、延暦15（796）年に平安京羅城門の東に建てられ東寺とも呼ばれます。弘仁14（823）年、嵯峨天皇が弘法大師に下賜し、伽藍が整備されました。今回、発掘調査の対象となった東大門の創建年代は不明ですが、建久年間（1190～1198）に諸門とともに再建された可能性があります。また、南北朝の動乱時に門を閉じたため、以来「不開門」とも呼ばれています。慶長10（1605）年、豊臣秀頼により大修理されており、その後、江戸時代後半にもたびたび、修理願いが出されています。

今回の発掘調査は、現在の基壇の年代や構造を明らかにし、建造物の修理事業の基礎資料を得るために行いました。

発掘調査は、東大門の西辺の礎石列をつなぐトレンチとそれに直交するように門の東西中央にトレンチを設定し、土層断面を詳細に観察しました。

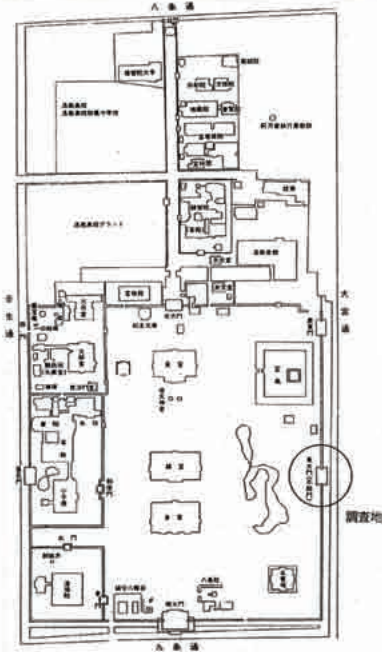
その結果、最も深いところで慶長年間（1596～1615年）よりも古いと考えられる整地層を確認しました。整地は確認できるものの、礎石との関係が不明なため、東大門の創建年代を知ることはできませんでした。一方、礎石の下半以下に堆積する整地土層から慶長年間（1596～1615年）に比定できる安土桃山時代から江戸時代初期の土師器皿が出土していることから、現在の礎石は、その時期に改修されたことを示しています。その後、多くの瓦とともに伊万里碗や土師器皿が出土していることから、江戸時代後期に整地されたことがわかりました。なお、最上層には、大正時代の整地層が部分的に厚く堆積していることもわかりました。

今後は、出土した陶磁器類の調査を行い、文献上で確認できる修理に関する記事との比較検討を行う必要があります。

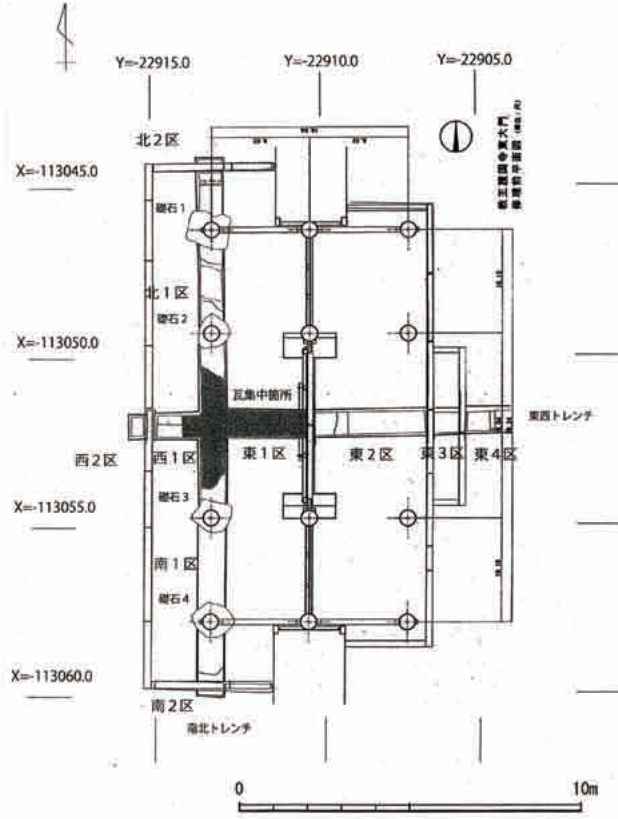


0 500m

調査地位置図 (京都西南部)

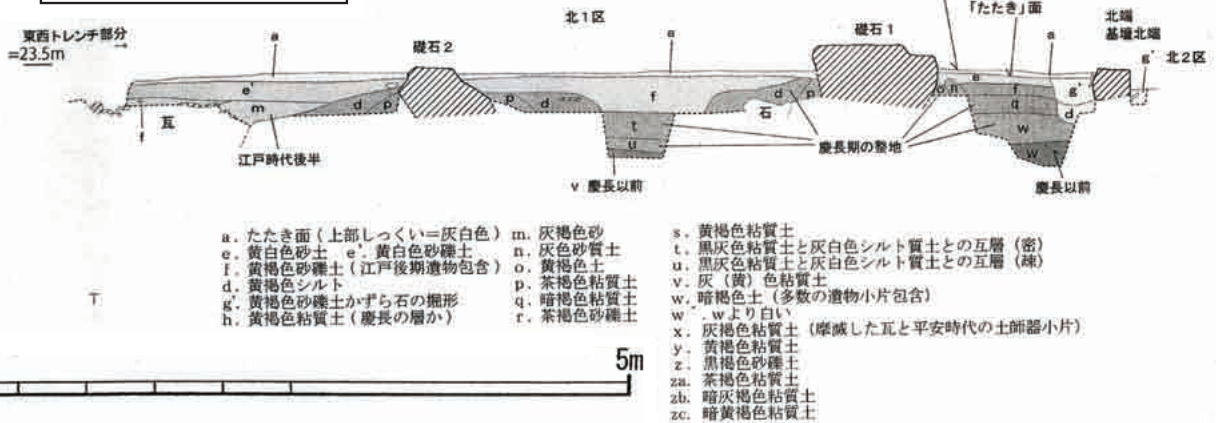


東寺境内図



調査状況図

南北トレンチ土層断面 (西壁)





KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、小さな展覧会などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189